ために、木曽義仲が放った一本の矢が、日本の侍文化の起源であるという所以です。

花馬祭り（花馬行列）

1184年木曽義仲が平氏を破り、征夷大将軍の称を賜った知らせに、坂下の人々は喜び勇んで、幣をつけた矢を木曽馬の背につけ、坂下神社に戦勝報告をしたのが、花馬祭りの起源であるといわれています（道の駅「きりら坂下」案内板参照）。祭りでは、鞍に矢をさした３頭の木曽馬を花馬として３つの地区を行列し、JR坂下駅付近で合流してから坂下神社に向かって練り歩きます。木曽義仲の放った矢は「花串」と呼ばれる８色の矢となり、花馬に飾られた365本の花串は五穀豊穣を願うものとなったといわれています。10月の第１日曜日、第２日曜日に、南木曽町田立と中津川市坂下でそれぞれ花馬祭り（本祭）が開催されます。当日は消防団の人たちに先導された花馬に飾られた義仲の矢が、金、銀、赤、紫などの花串となり、とても華やかです（表紙の写真）。３頭の花馬、氏子、子供、見物の人々が坂下神社に到着するといよいよ花馬祭りのフィナーレ「花奪り（はなどり）」を迎えます。木曽馬に飾られた義仲の矢（花串）を氏子、見物客が一斉に奪い合うのです。見物客を囲っていたロープがさっと外されると、私たちもその渦の中に巻き込まれました。100～200人の人々が一斉に矢を奪い合い、中には人の背中に乗って、１人で花串20～30本を取ってしまう「暴れん坊将軍」のような人もいます。

花串を奪い合う「花奪り」

私たちは２本の花串をとることができました。２本の花串を横に広げてみると、花串は８色の紙で飾られ、鏑矢の形をしていました。

義仲の放った一本の矢に始まる侍文化は、20世紀から映像作品の中で海外に紹介されました。日本映画『七人の侍』（1954年）、テレビドラマ『隠密剣士』（62年）、アメリカテレビドラマ『将軍　Shogun』（80年）、映画『THE LAST SAMURAI』（03）などの作品がアメリカ、フランス、イタリア、オーストラリア、中国などで大ヒットして、アメリカ・ヨーロッパ圏では「SAMURAI」（侍）、中国・アジア圏では「WUSHI」（武士）という言葉でブームを引き起こしました。ゼミ合宿に参加した留学生の世代にとっては、アニメ作品の『忍者ハットリくん』（64年）、『ドラゴンボール』（84年）、『忍たま乱太郎』（94年）、『NARUTO』（99年）などの忍者ものアニメがよく知られ、アニメ作品によって生まれた「NINJA」ブームが、海外での「SAMURAI」ブームを後押ししたといわれています。

イギリスの「ポピー・デイ」

法学部　多田　哲也

もう十年以上も前の事ですが、大学から研究休暇を取って、イギリスのオックスフォードで一年間、一軒家を借りて家族と過ごしていました。そんなある日、家族を連れてロンドンに日帰りで観光に行った時に、定番の観光スポットとして有名なウェストミンスター寺院の前で、たくさんの赤いポピー（芥子、ケシ）の造花が飾られているのを目にして、いったい何だろうと思いました。その日一日はロンドンの街中を歩いている人たちの間でも、ポピーの花を身に着けている人たちをよく見かけて、これは何か特別な意味があるんだろうけれども何なんだろ

うか、と不思議に思いました。

歩いている人に聞いてみたら、それは「ポピー･デイ（Poppy Day）」とか「リメンブランス･デイ（Remembrance Day）」とか呼ばれるもので、第一次世界大戦の終戦の日を記念して戦没者のために祈るのだと教えてくれました。後で調べてみたら、今では第一次世界大戦に限らず、第二次世界大戦も、またその他の戦争の戦没者のためにも祈ることになっているようです。造花のポピーの花は日本での赤い羽根の募金のような感じで売られていて、その収益は生活に困窮している戦没者の遺族や傷痍軍人などのために使われるのだということです。そしてこれも赤い羽根の募金と似ていますが、買った人たちはそのポピーの花を胸に着けることになっています。

このポピー・デイというイギリスでの行事の始まりは1919年、つまり第一次大戦の終戦の翌年に、時のイギリス国王ジョージ五世（現在のエリザベス女王のおじいさんにあたります）がイギリス国民に向かって、前年1918年の11月11日午前11時に戦争が終わったことを記念して、同じ日、同じ時刻に戦没者のために２分間の黙祷を捧げてほしいと呼びかけたことに始まります。現在でもその２分間の黙祷の習慣は続いています。赤いポピーの造花の方は、第一次大戦中に大英帝国軍の軍人、軍医としてベルギーのフランドル地方の戦場にいたカナダ人ジョン・マクレイ（John McCrae）が、親しかった戦友の死を悼んで、「フランドル（フランダース）の野に（In Flanders Fields）」という詩を書いて、そこで「戦死した兵士たちの墓のまわりに咲く赤いポピー」ということが言及されたことに由来します。

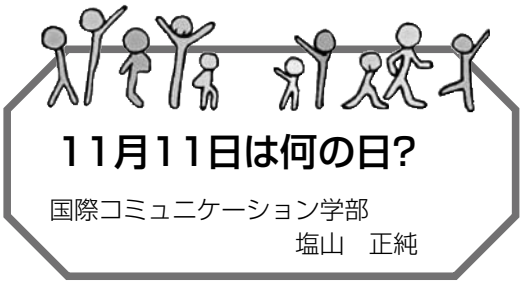
私たち家族がロンドンに観光に行った時には、この行事のことは全く知らなかったので、逆にとても印象に残ったのを覚えています。そしてその終戦の記念日も第二次世界大戦のものではなくて第一次世界大戦のものだということも、何かとても強い印象を受けました。日本人にとっては言うまでもなく、国土を焦土と化した凄惨な第二次大戦（太平洋戦争）と比べると、第一次大戦はかなり歴史的重要度が下がる感じなのですが、イギリス人にとってはこの行事からもわかるように、むしろ第一次世界大戦の方が、彼らの国の歴史にとってかなり重い存在なんだなあと思わされました。

その理由の一つとしては、どちらの大戦でも英仏連合vsドイツという戦いがあったわけですが、1939年に始まった第二次大戦では、ヒトラーの率いるドイツはフランスをあっという間に降伏させたので、逆にヨーロッパ大陸での英仏vsドイツの地上戦はあまり大規模化しませんでした。それに対して1914年に始まった第一次大戦では、英仏軍とドイツ軍の大陸での地上戦は、始めから長期にわたって戦線が動かない膠着状態に陥り、双方にとって極めて悲惨な消耗戦になりました。なかなか決着がつかずに、ただひたすら兵士たちの命が大量に失われていくことになったのです。

日本の戦没者数は第一次大戦が450人、第二次大戦が310万人なのですが、イギリスの戦没者数は第一次大戦が99万人、第二次大戦が33万人という数字なのです。すべての参戦国の戦没者数で言えば、第二次大戦の方が多いのはもちろんなのですが、イギリスという国にとっては第一次大戦の方がより悲惨な体験だったということが、この数字だけからもよく分かると思います。イギリスの小説やテレビドラマなどからも、イギリス人がそう感じていることはうかがい知れます。最近ではアメリカでも大ヒットしたイギリスのテレビドラマ「ダウントン･アビー（Downton Abbey）」（日本でもNHKで放映されました）の中でも第一次世界大戦の悲惨さが描かれていました。

先に述べたように、今ではこのポピー・デイは第一次大戦だけではなく第二次大戦やその他の戦争の戦没者のためにも祈る日なのですが、その起源が第一次世界大戦の終戦記念日であるということは、やはり多くのイギリス人たちに

とっては、この大戦はとてもつらかったものとして100年もたった今でも記憶されているということだと思います。多くの愛する人を失っただけではなく、この戦争のせいで大英帝国の覇権は終わりを告げ、古き良き時代はもう二度と帰ってこないのだ、という深い悲しみもまたそこにはあるからでしょう。



11月11日は何の日?

国際コミュニケーション学部
塩山　正純

何年か前の授業の教室で、始まる直前だったか、終わりのチャイムが鳴った直後だったか、ひとりの学生がカバンからおもむろにグリコのポッキーを取り出して、周りの近しい友人連中に配り出した。おじさんの目には不思議な光景で「なんでポッキー？」と尋ねたように記憶している。学生曰く「だって今日ポッキーの日ですよ」。わたしはその時はじめて世間では11月11日が「ポッキーの日」という一種の記念日であることを知った。

気になって少し調べてみると、江崎グリコが広報活動の一環で定めた記念日で、正式名称は「ポッキー＆プリッツの日」と言うらしい。ちなみに施行日は平成11年11月11日で、日本記念日協会による正式認定も受けているとのこと。施行からすでに20年、大学１年生の人生より長い歴史がある由緒正しき記念日のようだ。

最近、ある授業でテキストにした読み物の文化背景を調べているうちに、中国でも11月11日をあるひとたちの記念日として、祝っているのかどうかは知らないけれども、この１日のネット通販の売り上げがとてつもない数字を弾き出していて、中国の国内経済に少なからぬ貢献をしているらしいことが分かった。

すでに知っている人も多いとは思うが、中国では11月11日を、若者によるエンターテイメント的な記念日として、“光棍節 Guānggùnjié”と呼んでいる。いわゆる「おひとりさま（独身）」の日と言うことだ。なぜ“光棍節”と呼ぶのかと言うと、この日付の４つのアラビア数字の「1111」がちょうど“光（形容詞：つるつる・すべすべ・ピカピカ）”な“棍”（棒）が並んでいるように見えるというビジュアル的な理由である。また、“光棍”は、厳密にはアール化して“光棍儿 guānggùnr”だが、ちょうど（これも厳密に言えば、男性の）独身者を指すので意味的にもしっくり来るらしい。

真偽のほどは定かではないが一説によると、11月11日が記念日になったのは1993年、ある大学の学生寮の一室、消灯後の夜な夜なのお喋りで、「いかに独身状態を脱するか」という話題の中から生まれたアイデアらしい。

そうした由来はともかくとして、ここ数年来の“光棍節”のネット通販業界の売り上げの盛況ぶりは、スゴいことになっているらしい。2018年の数字によると同日の販売開始から４分１秒で200億元（「円」ではない）に達したとのことである。ただ、20世紀末から一貫してメジャーな記念日だったかというとそうでもなく、このところ日増しに自由度を増していく“単身貴族dānshēn guìzú”（独身族）の右肩上がりの増加と、ネット通販のマーケティング戦略の大いなる相乗効果の結果、と見るのが適当のようである。

さきほど授業でテキストにした読み物の調べものと言ったが、最初に調べていたのは“剩女 shèngnǚ”ということばの周辺である。直訳すれば「余り女」という、あまり雅びやかではない響きのこのことばは、2007年に中国の教育部（日本の文科省にあたる中央省庁）が公表した171個の新語のラインナップに初めて登場した比較的新しいことばである。さらに遡ること４年、日本でエッセイストの酒井順子が『負け犬の遠吠え』（講談社2003）の中で「負け犬とは……狭義には未婚、子ナシ、三十代以上の女性